

社会と調和した未来を考えるリゾートトラストグループのサステナビリティマガジン

< テーマ >

Together

ホテルと美術館が融合した「サンクチュアリコート高山 アートギャラリーリゾート」

Sanctuary Court Takayama

私たちのこだわり



01 北アルプスの絶景を味わえる「スカイテラス」

当ホテルのスカイテラスは、丘の上に立つホテルならではの北アルプスの絶景を味わうことができます。都市部では見られない広く抜けた空と、遠くに望む山々の稜線の景色は、宿泊する目的の一つにもなります。地元出身のスタッフも「いつも見てきた景色とは一段と違う眺めだ」と感嘆するほどです。高山に建つホテルならではの魅力として、今後もこの絶景を守っていきます。



02 高山駅とホテル施設をつなぐ「EVバス」

高山の自然環境を守り、観光産業の発展に貢献するため、ホテル業界初となる、ホテルと最寄り駅を結ぶ送迎EVバスを導入しています。伝統ある高山の市街地にも馴染むカラーリングで沢山のお客様にご利用いただき、ご好評をいただいています。今後も、周辺自然に配慮した施設運営に取り組んでいきます。



03 飛騨高山の雪解け水から生まれた「ひだまりの湯」

当ホテルの大浴場にある露天岩風呂と内風呂では、飛騨高山温泉「ひだまりの湯」を楽しめます。このお湯は、飛騨高山の雪解け水から生まれ、やわらかなお湯が特徴で、肌を整える「美肌の湯」として知られています。冬になると、露天風呂に設置されたロックウォールから流れる岩清水が氷瀑となり、冬の高山を感じさせる美しい景色が広がります。



04 飛騨の自然と木材を使った伝統工芸「飛騨木工」

飛騨の木工文化は、飛騨の豊かな自然と豊富な木材、人々の実直な気質によって育まれてきた伝統工芸です。中でも「曲木」は木材を無駄なく利用できる、用と美を兼ね備えた技法です。館内レストランや客室の椅子に採用することで地域文化を感じることができ、お客様との会話のきっかけにもなっています。

Together

社会と調和した未来を考えるリゾートトラストグループの
サステナビリティマガジン

2025年3月28日発行

リゾートトラスト株式会社

〒460-8490 名古屋市中区東桜2-18-31
TEL: (052) 933-6000(大代)
<https://www.resorttrust.co.jp/index.html>

サンクチュアリコート高山 アートギャラリーリゾート

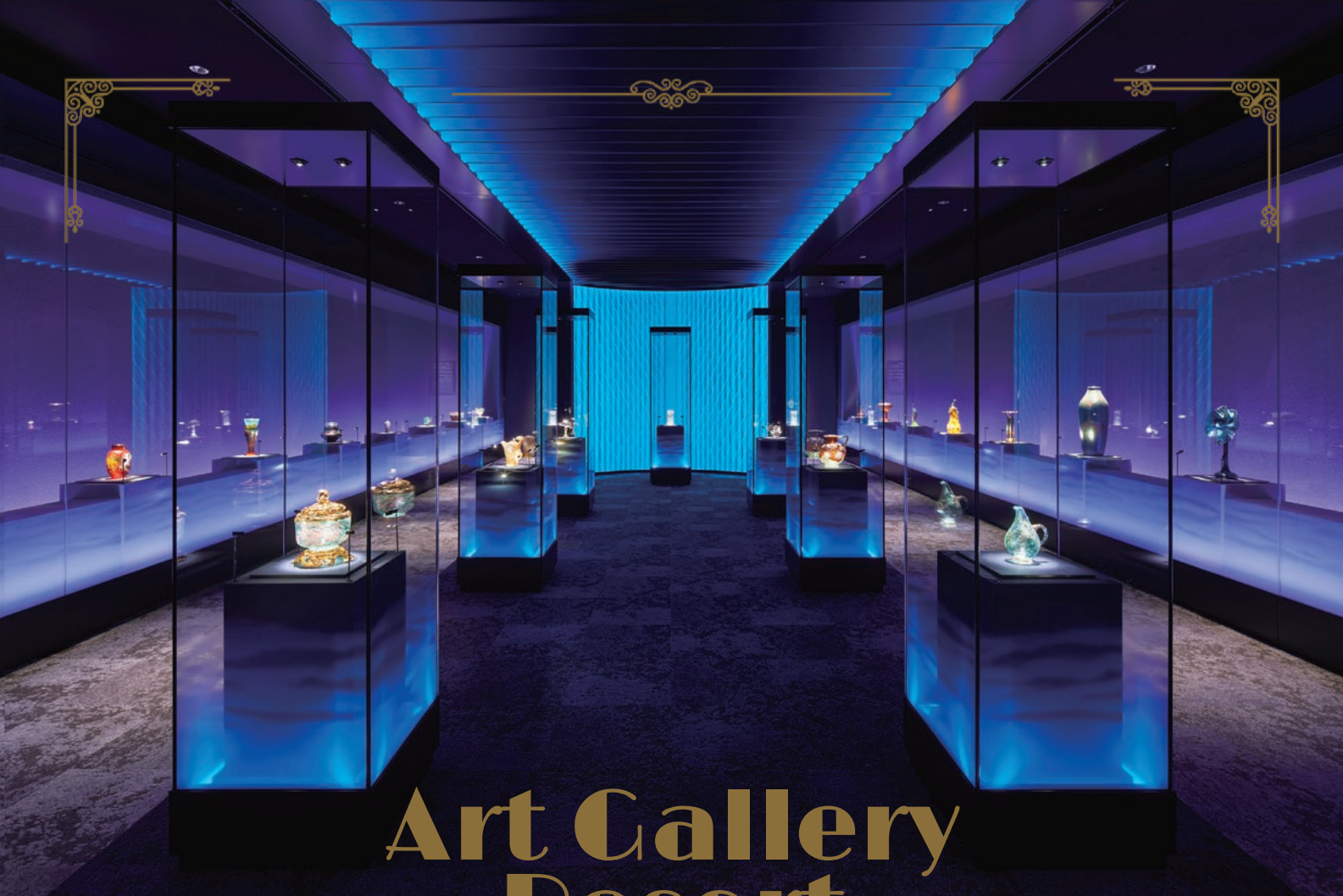
〒506-0055 岐阜県高山市上岡本町1丁目124番地1
TEL: (0577) 40-1000(代)
<https://sanctuarycourt.jp/takayama/>



「サンクチュアリコート高山アートギャラリーリゾート」の紹介サイトです。



リゾートトラストのサステナブルな取り組みを紹介しています。



Art Gallery Resort

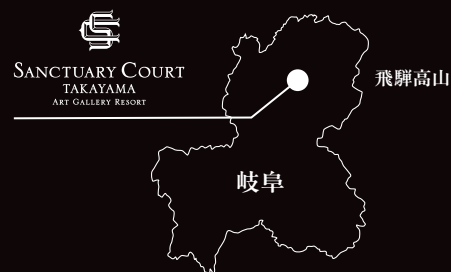
ホテルと美術館が
ひとつになった、
アートギャラリーリゾート

ミシュラン・グリーンガイド・ジャポンで
三つ星を獲得した飛騨高山美術館。

その跡地に誕生したのは、ホテルと美術館が融合した今までにない
「アートギャラリーリゾート」。

旧美術館から受け継いだ美術品や館内の至る所にアートがちりばめられ
知的な癒やしに満ちた雰囲気演出。

芸術に囲まれた空間で、最高の寛ぎが生まれる。



座談会

ホテルと地域の共創実現にむけて

飛騨高山美術館とリゾートトラストの出会い、今後の発展にむけた考え・想いを、
関係者による座談会を通してお伝えします。



座談会メンバー

田中 明

岐阜県 高山市長



向井 公規

飛騨高山美術館 館長



花田 慎一郎

リゾートトラスト株式会社 専務取締役

Q. リゾートトラストと飛騨 高山美術館の出会いに ついて教えてください。

花田: 私と高山市とのお付き合いは、前戦のJR東海で秘書部長を務めていた10年以上昔に遡ります。鉄道と地域との連携を深めるべくこの地を訪れ、行政や観光関係の方々から色々な話を伺いました。その後、縁あってリゾートトラストに転職し、中部地区として新案件の検討を始めた時、まず浮かんだのが「高山」でした。そこで以前知り合った方々にご相談したところ、幾つかの候補地の情報が送られてきました。その一つが「飛騨高山美術館」だったのです。早速、当時館長だった向井鉄也さん(現名誉館長)を訪ね、差し向かいで

お話する機会を得ました。2018年の11月のことです。

向井: 飛騨高山美術館は、私の父・向井鉄也が1997年に創設した施設です。それまで彼は約6年半をかけアール・ヌーヴォーやアール・デコをはじめ約850点もの美術品を収集してきました。単に自分の好きな作品を集めたのではなく、各作家の進化の過程や美術史全体の観点から重要と思える作品を選んだコレクションです。そのコンセプトを理解して観賞してほしいとの思いから、展示にもこだわりました。たとえば一つの家具を展示するため、その時代にその家具が置かれたであろう部屋を作る、といった徹底ぶりです。そうした努力のお陰もあり2007年にはミシュランのガイドブックで三つ星を獲得、以後も7期連続で星を

維持して国際的にも高い評価を得てきました。

田中: 私も飛騨高山美術館には何度も訪れています。当初からカフェやレストランが併設され、コーヒーを飲み立ち寄りたり、ランチやディナー目的で訪れる人も多い施設でした。私もクリスマスに妻とともに来たことがあります。この辺りには無かった都会的で洗練された空間で、まさに高山に新風を吹き込んだ施設でした。以前、高山市職員として海外戦略を担当していたこともあるのですが、市内に「ミシュラン三つ星」の施設があることは観光面で非常に大きかったですね。

向井: ミシュランの評価では、美術館の収蔵品や建築物の価値だけでなく、景観や地域との関わりも基準になります。当館の場合、以前から夏場には庭でビアガーデン

ホテルと地域の共創実現にむけて

を開くなど四季折々にイベントを開いたり、結婚式場としても利用してもらうなど、地域の方々に親しまれる施設を目指してきました。「三つ星」はそうした理念や取り組みも含めた評価だったと思っています。

Q. ホテルと美術館が融合することになった背景を教えてください。

花田: 初めて当館のコンセプトや運営方針を伺ったとき、私も大きな感銘を受けました。一方で、鉄也さんは「美術館というのは収益化が本当に難しい。このままだと近い将来閉館を余儀なくされるかも…」と弱気



田中 明

岐阜県高山市出身。1987年に高山市役所に入庁し、企画部長や海外戦略部長を務める。2022年9月、高山市長に就任。

にもなっておられました。それで私は思わず「ここにホテルを建てるので、美術品を置いてください!」と言ってしまったんです(笑)。すると鉄也さんは「実は、私もそういうプランを考えていた」と。そこからすべてが始まりました。

向井: 「美術館とホテルの融合」という構想は、父も以前から持っていたようです。実はリゾートトラスト以前にも複数の企業から打診があったのですが、色々な意味で想いが通じ合う相手には出会えていなかった。花田さんが現れて、ようやく自分の大切な美術品を託すに相応しい相手が見つかったと感じたのだと思います。

花田: たまたま向井さんの親族に当社の会員様がおられ、リゾートトラストに高評価をいただいていたことも幸いしました。翌2019年1月には公規さんともお会いし、基本的な考えが同じであることが確認できましたね。

田中: 当時はちょうど東海北陸自動車道の整備が進み、名古屋から高山のアクセスが2時間程になった時期。観光地として集客力を高めたこともプラス要素だったのでは?

花田: おっしゃる通りです。美術館と融合したリゾートホテルは、当社も初めての挑戦でしたが「アクセスの良さや多様な観光資源も含めたトータルな提供価値を考えれ



向井 公規

飛騨地域のアミューズメントカンパニー『株式会社 紀文』の代表取締役社長。同社が管理している飛騨高山美術館の館長も務める。

ば収益化は充分可能」と社内でもコンセンサスがとれ、プロジェクトが正式にスタートしました。

向井: 建物の設計や美術品の展示方法については、リゾートトラストさん側から色々アイデアを出してもらい、そこにアートのプロとして私たちも注文をつける、といった形でじっくり協議しながら作ってきましたね。

花田: 設計が完了したのは、まだ世の中がコロナの渦中にあった2021年6月。着工前に会員権の販売を開始したのですが、ふたを開けてみれば歴代トップのスピードで飛ぶように売れていきました。嬉しかったですね。



オープニングセレモニーの様子。左から、向井鉄也氏(現名誉館長)、伏見有貴(当社社長)、田中明氏(高山市長)、向井公規氏(飛騨高山美術館館長)。



小高い丘の上に佇むサンクチュアリコート
高山からは、美しい高山の町並みが一望できます。

Q. 今後の美術館の発展にむけた考えを教えてください。

花田: 当ホテルの開業に至るまでには田中市長はじめ行政や観光業など地域の多くの方々と毎日のように真剣に議論し、アイデアをぶつけ合いました。地域とこれほど密に連携したプロジェクトは当社も初めてで、思い入れも非常に大きいです。**田中:** リゾートトラスト様からは建設後も当市に多額の寄付をいただいております。ホテル周辺の遊歩道など飛騨民俗村エリアの環境整備を進めています。いま高山の観光客はインバウンドも国内旅行者もコロナ前を上回る勢いで伸びていますが、この施設は間違いなくその牽引役の一つ。まちの新しいランドマークだと言えるでしょう。



花田 慎一郎

日本長期信用銀行、東海旅客鉄道を経て、2018年4月に当社入社し、数々のホテル開業・運営コンセプト立案をリード。2023年9月から当社専務取締役開発部門管掌就任。

向井: ありがとうございます。オープニングセレモニーで父も述べていましたが、美術品とは個人の所有物であっても、同時に「世界からの預かりもの」だと私たちは認識しています。自分たちが預かってきたものを今度は新しい担い手に預ける。そのバトンの繋ぎ手になれたことに感謝しています。

花田: バトンを受けた者の責任として、まず目指したいのは閉館でリセットになった「ミシュラン三つ星」の復活です。田中市長はじめ市の皆さんにも是非協力をお願いしたいですが、われわれも新たな魅力の開発に努めていきます。五感をフルに使って「没入」でき、季節や時間帯で違った楽しみ方ができるような、新しい美術館を目指たいです。

向井: 「光」や「音」や「香り」が加わることで、今までにない芸術観賞ができることを私たちも学ばせてもらいました。これを発展させて、たとえば静かな真夜中にワインでも飲みながらじっくりとアートを堪能できる「ナイトミュージアム」がやれないか? などと夢が広がっています(笑)。

田中: 私も体験しましたが、時とともに照明や音、香りが変化していつまでも作品の前に座っていただける心地良い時間でした。観光客だけでなく市民の憩いの場にもなってほしいとの思いから市も積極的に情報発信をしています。

花田: 当社としても地元の方々が気軽に訪れて、癒しを感じてもらえる場にしたいと

考えています。同時に、高山というまちの素晴らしさを会員の皆様にもさらにアピールしていきたいです。景色や食べ物、水、温泉、そして人。知れば知るほど高山の魅力は奥が深い。お客様にはどどんまちに出てそれを発見してほしい。ホテルのファンと同時に高山のファンにもなってもらい、それがリピーターを増やす大切な要件だと考えています。

向井: 実際、最近では市内の飲食店をはじめ色々な場所にホテルの宿泊者がお見えになっていると聞きます。先日も夜たまたま立ち寄ったバーで、気がつけば自分以外は全員ホテルの宿泊者の方々でした(笑)。**田中:** それは市としても嬉しい話ですね。地域と触れあう中で、別の高山の魅力をきっと発見してもらえるでしょう。「高山のファンを増やしたい!」という想いは、10年前に花田さんがこのまちで出会った人々全員が持っていたはず。脈々と繋がっているその想いをしっかりと受け止め、これからも皆さんとの連携をさらに深めていこうと思っています。



学芸員が語る

飛騨高山美術館のこれから

飛騨高山美術館 Hida Takayama Museum of Art

当館は、旧飛騨高山美術館を引き継いだリゾートトラスト株式会社が運営する美術館です。エミール・ガレの花器「フランスの薔薇」やルネ・ラリックの「シャンゼリゼ・ショッピング・アーケイドの噴水」など、世界中から集められたアール・ヌーヴォー、アール・デコの作品を収集・展示しています。



林 宏美

2023年6月、リゾートトラストに入社。学芸員として、飛騨高山美術館の開業準備に携わるほか、展示企画やアートイベントの企画運営を担当。

美術館の魅力を形に

この仕事に就く前は、別の美術館で学芸員の業務サポートや館内受付を担当していました。そんな折に館長である向井から飛騨高山美術館を紹介していただきました。実はそれまで飛騨高山美術館のことをよく知らなかったのですが、もともとアール・ヌーヴォーやアール・デコの時代には興味があり、なかなか無いチャンスだと思ってチャレンジしました。

ここに来てからは、未経験だった音声ガイドや図録の制作にも携わりました。図録はビジネスパートナーの指南を受けつつ、自分達でデザインや配置を考えました。作品をよく知る美術関係者から作品の美しさを表現するためのご指摘も受け、何度も校正を重ねて完成に至りました。

当美術館には一般の方と宿泊者の方が来館されます。特にご宿泊になる会員様からは、アートギャラリーという新概念の施設への期待値が高く、美術を目的にお見えになる方も多いためスタッフも十分な知識を備える必要があります。開業前から勉強を重ねました。会員制ホテルに求められるサービス水準は一般の施設よりも高いものです。そのご期待に応えるべく、スタッフもお互いに学び合い、プティックでオリジナルの美術館グッズを販売するなど、当施設全体のコンセプトに基づいた運営に努めています。多くのお客様から「すごく綺麗だった」と高い評価をいただいております。アール・ヌーヴォーやアール・デコの本場である西洋諸国の来館者からも「展示方法が素晴らしい」などのご感想を頂いております。

何度訪れても新しい発見がある美術館へ

新しい飛騨高山美術館は、五感をフルに使って全身で感じていただける美術館です。館内にある「うつろいの間」では、季節はもちろん、時間帯や気温によっても変化する様々な照明を楽しんでいただけます。一時間後の気温に呼応して色が変わるので、同じ展示品であっても全く違う見え方になるはずです。また展示物に近づくと音が大きく、離れると遠くに聴こえる立体音響も導入しています。何度も訪れていただきたいからこそ工夫です。来館者の皆様には、毎回新たな発見をしていただけたらと思います。

今後は、例えばルネ・ラリックの香水瓶の展示では香りをテーマにする、といったコラボレーション展示もしてみたい

と考えています。他にも会員制ホテルの利点をフルに生かして、ガラス細工の作品で料理やワインを召し上がっていただくなど、実際に作品に触れていただく機会もつくりたいです。さらに会員様の作品を披露する展覧会なども開催できるかもしれないと考えています。

かつての飛騨高山美術館は、ビアガーデンや花火大会、結婚式の開催など地域密着型の施設でした。現在は会員制ホテルと融合されており、一般の方々にとっては敷居の高さがありますが、地元の皆様にも再び広く気軽に訪れていただける美術館でありたいと思います。たとえば大学のゼミを誘致して、この美術館を地域や世界にアピールする方法と一緒に検討するなど、今後は高山市など行政をはじめ外部との連携をもっと強めていきたいです。



エミール・ガレの花器「フランスの薔薇」。



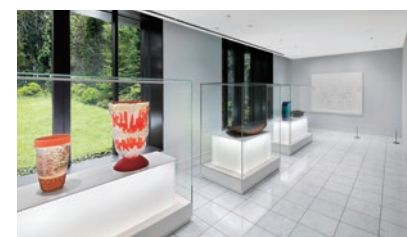
飛騨高山美術館のロビーに設置されているルネ・ラリックの「シャンゼリゼ・ショッピング・アーケイドの噴水」。



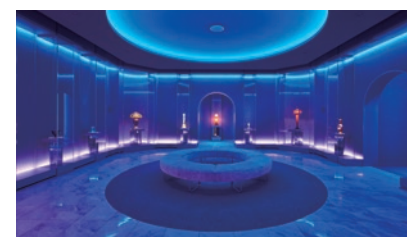
「飛騨高山美術館名品図録」が第66回全国カタログ展にて図録部門の日本製紙連合会賞／銀賞を受賞。



アール・ヌーヴォーのガラス工芸品の数々を展示。



光の変化と作品の調和を愉しめる「光のギャラリー」。



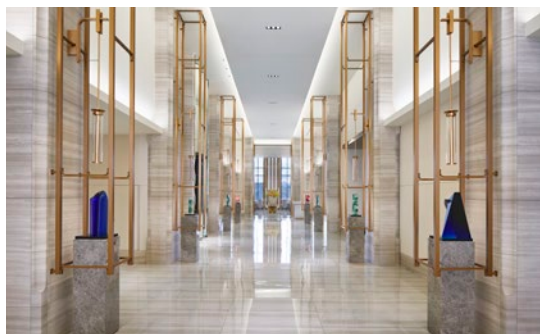
季節や時間帯、気温によって音楽、照明、香りが変化する「うつろいの間」。



Close Up!

サンクチュアリコート高山
アートギャラリーリゾートは、
ここが違う

当社は、サンクチュアリコート、ベイコート倶楽部、エクシブといった異なるコンセプトの会員制リゾートホテルを運営しています。その中で、最も新しいホテルシリーズが「サンクチュアリコート」です。2024年3月25日に開業した「サンクチュアリコート高山アートギャラリーリゾート」の特徴や魅力をブランドアンバサダー、総支配人が語ります。



サンクチュアリコート



都会の喧騒から離れた格別のプライベート空間のなかで、新たな滞在体験・価値観を提供するディスティネーションホテルです。



ベイコート 倶楽部



オーダーメイドパーソナルサービスと、オールコンシェルジュ体制を軸にサービスクオリティにおいて最上級のホスピタリティを実現した、会員制リゾートホテルです。



エクシブ



海、山、温泉など多彩なロケーションと、独自のコンセプトで全国に展開する会員制リゾートホテル。心踊る極上のリゾートライフをお楽しみになれます。



鈴木 理衣名

サンクチュアリコート高山
ブランドアンバサダー

何度も味わいたくなる 体験価値を提供します

サンクチュアリコートのコンセプトはディスティネーションホテル。「旅の目的がホテル」であることが大きな特徴です。そのために、その土地の魅力を生かしたサービスや食事、館内や付帯施設での新たな体験価値・滞在価値をお届けすることに力を入れています。さらにそれらの価値を提供するスタッフ自身も、

お客様とのつながりを大切にし、一つの「ディスティネーション」でありたいと考えています。

「サンクチュアリコート高山アートギャラリーリゾート」は、併設する美術館が一番の特徴です。来訪されるお客様の多くが、そこに大いに期待を寄せられています。滞在するからこそ提供できる体験価値に満足していただき、「何度も足を運びたくなるホテル」を目指しています。

サービスを通じて、「感動 の連鎖」を生み出します

私は開業前のチームビルディングからこのホテルに携わってきました。コンパクトなホテルなので、異なる部門やレストラン同士がすぐに協力し合えるシームレスな環境があり、スタッフ同士の連帯感が強い施設だと感じます。また、お見えになったお客様に最大の感動を提供すべく、この地域ならではの「コト体験」づくりに力を入れています。高山という地は知れば知るほど深く、多くの魅力があります。地元出身のスタッフも多く在籍しているので地域の情報もたくさん共有されています。高山観光では古い町並などの有名スポットを楽しまれる方が多いですが、地域に根差すホテルだからこそ高山の新たな魅力をお客様へお届けし、「何度も足を運びたくなるホテル」になることをスタッフ一同心がけています。

私はブランドアンバサダーとして、当ホテルのスタッフ全員で『感動』を創出できるように努めています。ここには相手の喜びを自分の喜びややりがいを感じるスタッフが沢山います。全スタッフが協力し合いながら、当施設に宿泊されるお客様はもちろん、お食事や美術館を目的に来られる方、そして地域の皆様へ「感動の連鎖」を生みたいです。大きな魅力を感じていただき、感動していただくことこそが、再訪のきっかけにもなり高山地域の観光や経済の更なる発展に繋がると思っています。

以前、岐阜県立飛騨高山高校ビジ

ネス科に出張授業を行い、「新しい価値を創造し、富裕層をいかに呼び込み、地域活性化につなげるか」との学校側のテーマに対して、当社だから知り得る富裕層の方の特徴やニーズについてお話ししました。

サンクチュアリコート高山ならではの魅力は、やはり美術館です。「うつろいの間」の立体音響は本当に素晴らしく、同じ作品でも流す音楽によって壮大に感じたり、静けさを感じたりと、五感で味わえる仕掛けを凝らしています。私自身、初めて作品の前で聴いた「アメージンググレース」の素晴らしさは今も

忘れられません。ぜひそんな、他にはない感動の体験を、この美術館でしていただきたいと思っています。

これからサンクチュアリコート高山をもっと魅力的な場所にするために、私たちは人のつながりをさらに大切にしていこうと思います。私たちが提供を目指す感動は、スタッフが一体になった「心」があつてこそ生み出せます。もちろん高山の方々の温かみも、この地ならではの魅力です。ホテル開発段階で育まれた地域との繋がりを、私たちがしっかりと受け継ぎ、この地域と共にいつまでも成長していきたいと願っています。



スタッフ一丸となって、ホテルの魅力をさらに発信していくとともに、地域の皆様とのつながりを強化していきます。

総支配人から

「想い」を大切に、地域一体 のホテルであり続けます

金村 輝男

サンクチュアリコート高山 総支配人



当施設開業に際し私たちはスタッフ全員で話し合い、3つの行動規範を定めました。
1. かけがえのない人生に『最幸』と『感動』を
2. 『ART (A=Action 考動、R=Respect 相互理解、T=Trust 仲間)』基盤のチーム作り
3. 地域を愛し、愛される存在へ

地元の皆様には、開発段階から温かく迎えていただきました。高山市街を望む丘の上に建つ施設には「地域のランドマーク」としての期待が寄せられました。観光の活性化や、当社のお客様がもたらす経済効果など、私たちができる地域貢献は多くあります。

旧飛騨高山美術館は地域に根差し、ミシュラン・グリーンガイド・ジャポンで三つ星を獲得した美術館でした。現美術館にもそのような地域との共存が不可欠であると認識しています。地域の皆様とさらに深くつながり、われわれも「高山」を広く発信していこうと思います。

そのために最も重要なものは「人」です。どんなに良いものも、人の想いが無ければ成し得ません。これからも人を大切に、地域一体のホテルであり続けたいと思います。

PROFESSIONALS

AT SANCTUARY COURT TAKAYAMA

「最高のホスピタリティ」をつくるワンチーム

お客様一人ひとりの豊かで幸せな人生に真摯に向き合い、喜びや感動を生むために、情熱と誇りを持って日々の仕事に取り組んでいます。
ホテルで働くスタッフが一丸となって「最高のホスピタリティ」を提供していきます。



ホテルの印象を決める ベルスタッフとしての誇り

ゲートロビーアテンダント
高橋 滉平

ベルスタッフは、ホテルの中で最初にお客様をお出迎えする部署なので、お客様に「ここはすごく良いホテルだな」と思っていたくための最も重要なポジションだと思っています。他のコーナーと比べお客様と接する時間が限られるからこそ、短時間でいかに好印象を与えられるかが大切で「第一声」や「笑顔」を常に意識しています。

以前勤務していたホテルでもベルスタッフとして勤務していました。私にとってこんなに楽しい仕事はなく、自分の強みを生かせる場所だと感じています。お客様の顔とお名前をしっかりと覚え、それを喜んでいただけることが自信とやりがいになっています。今後もお客様をさわやかにお出迎えしていきたいです。

MY ITEM

お客様のお名前や特徴、車の車番などをしっかり覚え、手帳にも記録しています。滞在中も「〇〇様、お部屋いかがでしたか?」と、その方のための対応が出来るように心がけています。



自分でなければなれない 焼き手を目指して

鉄板焼
甲斐 奈穂

「焼き手」を志願したのは、熱い鉄板の前で颯爽と働く先輩社員の姿が格好良かったからです。目の前のお客様と直接交流できるこの仕事は、料理のお好みはもちろん、趣味嗜好の話もできるので、お客様を深く知ることができ、大きなやりがいを感じられます。

同じ食材であっても、新鮮さや焼き方一つで味が変わります。お客様により美味しく召し上がっていただけるように、色々な調理法や技術とともに食材自体の知識ももっと身につけたいです。地元の食材のことは地元の方が一番ご存じなので、買い出しの際には色々と尋ねています。私が焼くことで、お客様に会話も含めてよかった!と喜んでいただける、私でなければなれない焼き手を目指していきたいです。

MY ITEM

お客様の好みは様々。例えば魚の皮が苦手な方には、皮をパリッと焼くことで美味しく召し上がっていただけるなど、幅広く調理法を知っているだけで世界が変わります。



いつも同じことを、同じように 提供できるように

施設管理
坂井 孝典

今は施設管理という裏方の仕事に就いていますが、私は前職でもホテルマンを経験していました。ホテルという仕事の面白さ、楽しさは色々な経験ができることです。同じ業務であっても、毎日違うお客様がいらっしゃるので色々な場面に接することができます。

私にとっての最高のおもてなしは、「いつも同じことを同じように提供できること」。施設管理は、ホテル内の全部門と日々関わる部署のため、ホテルで働く全員の顔を誰よりも知っているという自負が私にはあります。何度もホテルに足を運ばれるお客様が、毎回「普通」に、変わらず過ごしていただけるように、「今の施設を10年後も同じ状態に保つ」ことが現在の目標です。

MY ITEM

施設管理の仕事は毎日変化の連続です。毎日のように色々なモノが壊れたり傷ついたりしますが、その対応には日々新しい発見があり、時には自分で直してみるのも楽しみです。



地元で学んだことが、 お客様との新たな接点に

イタリア料理レストラン OZIO ソムリエ
宮崎 智帆

フランス料理人だった父に憧れて、自分もその道を目指しましたが、ある時に飲んだワインの美味しさに衝撃を受けて、そこから運命的にソムリエを志しました。

ワインの知識は、上司や先輩から学んだり、本を読んだり、休日に酒屋さんやワイナリーに行ったりして培っています。高山のことを知らずに赴任したのですが、地域の魅力を知らずに接客するのは失礼と考え、地元の方からは日々地元食材や地域の魅力を教えていただいています。それらはお客様に喜んでいただくための大きな武器です。高山での出会いや知識はお客様への新しいアプローチになり、次回の楽しみとしてリピートいただくきっかけにもなっています。

MY ITEM

ワインを提供する際は、グラスを置いて注いでいる間に、生産地や生産者様の背景などをお客様に紹介しています。ワインの魅力をしっかり伝えることを意識しています。

